



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	音の民族誌 : モンゴル遊牧社会における人・動物・風景・霊的存在をつなぐ実践
Author(s)	薩仁図雅
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16966号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99810
Type	doctoral thesis
File Information	Sarantuya_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 薩 仁 図 雅

学位論文題名

音の民族誌

—モンゴル遊牧社会におけるヒト・動物・風景・霊的存在をつなぐ実践—

本論文は、モンゴル遊牧社会において歌、かけ声、沈黙、風の響き、動物の鳴き声といった「音」が、人間、動物、土地、精霊という多様な存在のあいだにどのような関係を生成し、世界を立ち上げるのかを民族誌的に明らかにするものである。

モンゴルにおける音の研究は、20世紀後半以降に主として民族音楽学、儀礼研究、人間・動物関係研究の三領域を中心に発展してきた。しかし、これらの研究はいずれも音を特定の文脈に限定した分析にとどまり、遊牧民が日常生活の中でどのように音を聴き、解釈し、諸存在との関係を形成しているのかという生活世界の音実践には十分に踏み込んでこなかった。本論文は、こうした先行研究の限界を踏まえ、音を関係生成の技法として捉える分析視角を提示するものである。

本論文において分析対象となる民族誌資料は、モンゴル国ドンドゴビ県ウルジット郡、ドゥブ県、セレグレン郡において実施したフィールドワーク（参与観察、音響記録、映像記録、インタビュー）によって収集したものである。調査においては、筆者がモンゴル遊牧民の家庭で育ったというポジショナリティにより遊牧の実践への参与や、存在論の共有といったオートエスノグラフィー的な要素を積極的に取り入れている。ただし筆者は、馬・羊・山羊の管理、競馬の補助、搾乳などの経験を持つ一方で、ラクダとの接触経験はこれまでほとんどなかったため、ラクダ搾乳や歌の実践は、新たな身体の実験でもあった。こうした慣れた身体と新たに学ぶ身体を往還する経験的観察のプロセスの中で可視化される、音が関係生成に果たす役割を複数の感覚レベルから分析している。

本論文の具体的内容は以下のとおりである。

第Ⅰ章では先行研究を批判的に検討し、研究の位置づけを明確にした。モンゴルの音研究は、ホーミー、長歌、儀礼歌、馬頭琴などの音楽に焦点が当たってきた一方、風の読み取り、草の擦れる音、家畜の呼吸の変化、沈黙の立ち上がりといった日常的な音は十分に扱われてこなかった。また、動物との協働を扱う人類学者の Fijn は動物誘導の技法として声掛けや身体動作を詳細に示したが、儀礼的音響や沈黙、精霊の応答、風の変化、音による関係回復といった領域は未だ空白であった。これに対し、本論文ではモンゴルの音世界の基盤としてモンゴル草原に広がる「沈黙」に着目する。沈黙とは無音ではなく、風や草、土壌、家畜の微細な動きを聴き取り、環境からの呼びかけに応答するための知覚的姿勢である。この静けさこそが遊牧民が日常生活・放牧・儀礼・家畜のケアを営む際の基盤となる感覚的環境であると同時に人間と非人間が世界を共有するための根本的条件である。

さらに感覚人類学、音の人類学、ケア論、マルチスピーシーズ人類学は、人間—環境—非人間の関係性を新たに捉え直す重要な枠組みを提示してきたが、音という感覚的かつ関係的な実践を中心に据えた研究は依然として限られている。本研究はこの欠落を補い、音を通じた関係生成という視点から新たな民族誌的枠組みを提示する。

第Ⅱ章では調査地の自然環境、季節移動、放牧のリズム、気象の変化、現代化の影響などを示し、音が生活世界とどのように結びついているかを明らかにした。第Ⅲ章ではホーミー、長歌、叙事詩、馬頭琴、労働歌・儀礼歌といった歴史的音文化を整理し、音が自然環境、移動、家畜との関係形成の中で発展してきたことを示した。

第Ⅳ章では草原のサウンドスケープを分析し、風、草の摩擦音、雷、家畜の鳴き声、人間と動物の音やゲル内部の生活音などが、天候判断、放牧、危険察知といった日常的意思決定を支える実践知であることを明らかにした。ここから音は単なる外的情報ではなく、環境とともに生成される、生きられた知覚であることがわかる。

第Ⅴ章では、モンゴル遊牧社会における馬のケアを音の視点から詳細に分析し、歌、声掛け、沈黙、身体接触が馬の情動と身体、そして人間との関係をどのように生成・調律するのかを明らかにした。本章の核心は、音が人と馬の関係における中心的な関係生成の技法であり、ケアの実践そのものを構成しているという点である。

第Ⅵ章では、モンゴル競馬の文化的・儀礼的・身体的実践のなかで、音（ギンゴー歌、声掛け、沈黙、風や鳥、馬の動き）がどのように場を構成し、人・馬・精霊を結びつけるかを民族誌的に明らかにした。本章の中心的主張は、競馬が単なるスポーツではなく、音響的・儀礼的・霊的实践として理解されるべき複合的な行為であるという点にある。

第Ⅶ章は、本論文の理論的中心となる章であり、音がどのように人間、馬、土地そして精霊のあいだに関係を立ち上げ、世界を生成するかを、オボー儀礼、ギンゴー、祈りの実践を中心に民族誌的に解明している。本章の核心的主張は、音および沈黙が単なる感覚刺激ではなく、存在者同士が互いを知覚し、交信し、結びつくための媒介＝出来事であるという点である。

第Ⅷ章は、本論文全体を通して馬を中心に展開してきた音の分析を、ラクダという異なる種と比較することで拡張し、音を媒介としたケア実践の多様性と普遍性を明らかにしている。具体的には、音が動物の身体・情動・記憶をどのように動かし、ケアの関係を成立させるのかを、馬とラクダの応答性を比較し、馬では、音が人と馬の動き・意図を調整し、協働関係を成立させていた一方、ラクダの場合、死産した子ラクダを探して落ち着かない母ラクダに対し、牧民が歌を歌いながら搾乳することで、緊張を緩和し、乳を分け与えるという形で関係を再構築していることが分かった。ここから、音は種によって異なる形で受け取られつつも、人と家畜の信頼・依存・共生を支える重要な媒介を成すものであることが示唆された。

終章では、これまで各章で検討してきたトピックを総合的に振り返り、競走馬の調教、子ども騎手の声の実践、馬つなぎ場でのケア、ラクダへの歌による働きかけ、ナーダムや儀礼における音の配置を統合的に考察した。モンゴル遊牧社会における歌、かけ声、沈黙、風、動物の鳴き声といった多層的な音の実践を民族誌的に記述することで、音が人間・動物・土地・精霊のあいだに関係を生み出し、日常生活や儀礼の場を形作っていることを明らかにした。本終章では、こうした分析を踏まえ、音を関係が立ち上がる場をひらく働きとして理解できることが示唆された。このように、本論文は、音がモンゴル遊牧世界において果たす具体的かつ実践的な役割を描き出し、人・動物・土地の関係性をめぐる議論を補完するものである。